

## 動物と遊んだ一日

十一月のある一日、私どもの園庭に動物のお客様を迎えました。

これは、ある動物を扱う会社から、数種類の動物を、一日借り受け、子どもたちに動物とのふれ合いを経験させようという新しい試みです。

私どもの園では、以前から、にわとり、兎、モルモット、おしどり、やぎ、その他小鳥などを飼いましたが、死んだり、野犬にとられたりして、今は、各保育室に、カナリヤ、文鳥と、園庭にわとりが数羽いるだけです。大学の敷地が広いためか、野犬には度々襲われ、その悲惨さは何ともいえないもので、すぐに補充する気になれません。

このような事情もあって、今回の試みがなされたともいえましょう。

子どもたちには前日に、来園する動物たちのことを話しておきました。チ



守 永 英 子

ンパンジーのさつちゃんのこと、ペペナナ、チコ、デコというヤギのこと、

カンガルーのホップ、ステップ、あひる、がちょう、ちやば、兎、モルモットのことなど。話して聞かせた時は、子どもたちは期待に満ちた顔でにっこりしました。

当日、子どもたちが大体登園したかと思われるころ、園庭の方がにぎやかになりました。大きい子どもたちは、着いたばかりの動物たちを取りかこみましたが、登園してきたばかりで、庭に出ようとして、その光景にぶつかつた三歳児のKちゃんは、保育室の前の階段に立ちすくんで叫けびました。

「みんなおうちにはいってないからいや！」やっと親の手から離れて、自由に遊べるようになつて数ヶ月の園内を動物達に占領された衝撃は大きいようだ。三歳児の中には、不安定にな

つて、保育者の手から離れるとべそをかく子どもの姿もちらほら見えました。やはり、日常の生活の中に動物がいて、子どもと動物との関係が段階を追って、ゆっくりと育っていくことが、子どもと動物とのふれ合いの本当の姿でしょう。

大きい子どもたちは、つなをつけてやぎをお散歩させたり、子やぎや兎、モルモットなどを抱いたり、手をつないであひるやがちようをとりかこみお散歩させたり、えさをやつたり、大にぎわいでした。

子どもたちの待望のチンパンジーは、係のおじさんに抱かれて登場、おじさんのおじさんに抱かれて登場、おじさんおじさんの差し出すセーターに自分から頭を入れたり、ズボンに足を通したり、着る気十分な所をみせて洋服をきると、園児と同じようにエプロンをさせてもらひ、おじさんの指図で、ひざを折つ

て正座し、皆におじぎをしました。係のおじさんにつけられ、ジャングルジム、すべり台、たいこ橋などを試みたあと、子どもたちと一緒に庭で食事。ナイフとフォークで上手に果物や野菜をたべるチンパンジーの前で、おかげを手でつまんでたべる幼児に、「お箸でたべましょう」と一こと。

動物と園庭で一緒に過ごした一日、好きな子どもたちは、いつまでも、兎やぎを抱いたり、えさをやつたりしていませんが、早くも動物たちから離れ、ふだんのように黙々と砂場を掘り返している子どもたちの姿に、「マネーネリズムの生活ではなく、驚きと感激のある生活」と焦る大人の気づかいとはうらはらに大人の目にはくり返します。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

自然や動物にふれることの少ない都会の子どもに、何かよい経験をと思う新しい試みではありました。しかし、その効果に関する見方はさまざまなります。動物を一日借りるその費用について、「高い」「安い」と反対の声が聞かれ、ものとその端的な表われと思われます。

狭い、コンクリートの箱の中に閉じこめられるような方向にある、都会の子どもたちの生活に欠けるものを補うために、いろいろな試みがなされることはよいことだと思いますが、保育の中には、必要な経験として定着するためには、思いつきを実行するだけでなく、その後の十分な検討が大切なことと思われます。